

マザーハウス

たより

2023

1 月号

**あなたは愛されるため、また、愛するために生まれてきたのです。
あなたが必要であり、大切です。マザーハウスはあなたの家族です。**

賀



正

表紙… エイル・Nさん
「賀正 日が出る国 四季の富士」

～受刑者の皆さんへ～

♪お問合せが多い内容（例：文通相手の追加を希望したのにまだ決まっていない等）は、返信にかえてお知らせ欄で回答させて頂くことがあります。毎月ご確認頂くようお願い致します。

♪移送・出所される方は必ずご一報下さい。MLP（文通）に参加している方は文通相手へのお手紙のみ出して頂ければ大丈夫です（差出人欄の住所で確認できるため）。

- 2 理事長挨拶
- 3 行事予定
- 4 特別コーナー
- 7 社会の声
- 16 育児日記
- 16 ささきみつおコーナー
- 18 塀の中のたより
- 19 健康相談窓口
- 20 ラブリーDAY
- 20 刑務所アート展情報
- 22 回復プログラム 実践
- 23 お知らせ

理事長挨拶

新しい年を迎えまして、皆さんは何か目標を立てましたか？私は様々な意味で実践の年になりたいと思っています。

昨年を振り返って、実践できていなかったことがたくさんあると気付かされました。他の人々、とりわけ最も弱い立場にある人に無関心でいようとすると誘惑に負けないように、目を背けることに慣れないようにして、「互いを受け入れ、互いに助け合うマザーハウスを築く」ために、努力を重ねて行きたいです。

また、多くの方から年賀状を頂きましたが、私の方で今年は年賀状を全く書けていないこと、どうかおゆるし下

さい。この場をお借りして、皆様に新年のご挨拶を申し上げます。昨年に続き、まだまだ財政的にも時間的にも厳しい状態にあり、私の力不足を感じる事が多々ありますが、今年も精力的に活動していきたいです。皆様、本年も宜しくお願い申し上げます。



一兵さん

昨年末に、前教皇ベネディクト十六世が神様のみもとに行かれたことを知りました。最後の言葉が「主よ、私はあなたを愛しています」でした。

私はキリストと出会い、人生が大きく変わりました。自分にできることを実践したいと考え、2021年の暮れに教皇フランシスコが来日で掲げた「すべてのいのちを守るため」を実践したく、Inter7を仲間たちと設立し、被害者・加害者・その家族のための対話と講演活動をさせて頂きました。特に私にとって、被害者遺族との対話、交流には大きな学びがあり、同時に、痛みもありました。でもそのことを通して、犯罪被害に遭われた方の生の声を聴くことが出来ました。この経験を大切にして、今年も新たなことに挑戦していきたいです。

年末は、マザーハウスの仲間と一緒に京都に行き、大学生と交流したり、死刑に関するイベントに参加させて頂いたりしました。クリスマス行事もあり、大晦日には仲間たちと年越しそばを食べ、新年を迎えました。子どもたちはお年玉を頂きました。仲間たちが

実家に帰ったり、我が家に遊びに来て一緒に食事をしたりと、楽しいひと時を過ごしました。

年明け早々には、情状証人として証言した方の判決公判があり、求刑3年6か月でしたが、裁判官によると酌量減刑を適用し、懲役2年、未決通算140日の言い渡しでした。それでも私は、この件は起訴する案件ではなかったと思っています。病氣の人にはまず治療が必要であり、刑務所に入所させても、治療ができないために余計に症状が悪化し、再犯のリスクが高まると思います。

最後になりますが、皆様にお知らせがあります。マリアコーヒーにつきまして、生豆や焙煎価格の値上げ、ドリッップバックの充填価格の値上げにより、今年4月より、価格の改定をさせて頂くこととなりました。今後ともどうぞ宜しくお願い申し上げます。

粉／豆200グラムは、1300円
（＋消費税＝1404円）、ドリッップ
10グラム（1回分）は、150円（＋
消費税＝162円）となります。

また、受刑者の皆さんへお知らせです。フランススコ事業部のインターネット検索について様々な意見があり、対応が難しい状況となっています。当法人の目的はあくまで更生改善と社会復帰支援です。受刑者の皆さんには追ってお知らせをお送りさせて頂きま

すので、ご確認頂きますようお願い致します。

行事予定

【1月】

17日

県立山口大学にて、ゼミ生と交流

25日

東京拘置所にて、弁護士と被告人に
面会

29日

ウイंकあいちにて、シンポジウム

30日

APS研究会

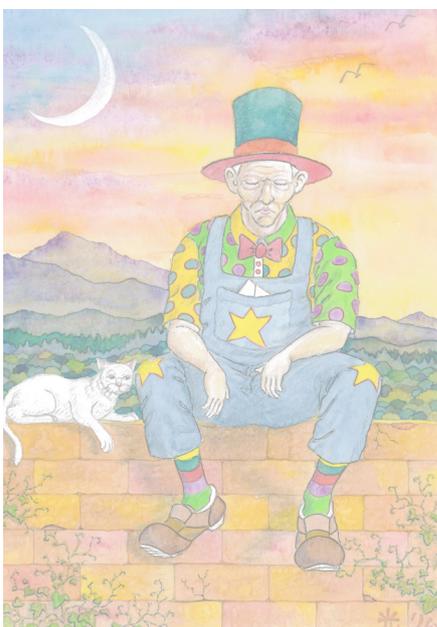
31日

Inter7ミーティング

【2月】

2日

世田谷区役所にて、勉強会



光りんさん

「道化師G：屏の上の老ヒロ」

特別コーナー

名誉教皇ベネディクト

十六世追悼ミサの

メッセージ

■ ブログ「司教の日記」菊地大司教の活動から「」より (<https://bishopkikuchi.cocolog-nifty.com/diary/2023/01/post-4aadbo.html>)。

☆

12月31日に95歳で帰天された名誉教皇ベネディクト十六世の追悼ミ

サが、司教協議会と教皇庁大使館の共催で、1月10日午前11時から、東京カテドラル聖マリア大聖堂で執り行われました。外交関連の日程なども配慮して1月10日となりましたが、連休明けの平日の日中と言ったこともあり、また感染症対策も考慮したため、多くの方に自由に参加いただくことはできませんでした。追悼ミサには教皇大使をはじめ、日本の司教団からは10名の司教が参加し、東京教区の二名の助祭が奉仕しました。

ミサ後の午後からは、ご自由に献花し祈っていただく場を設け、多くの方にお祈りをいただきました。感謝申し上げます。

以下、当日ミサを司教協議会会長として司式させていただきましたので、その説教の原稿です。

☆

「神は愛です。愛にとどまる人は、神の内にとどまり、神もその人の内に

とどまってくれます」。ヨハネの第一の手紙の一節で始まる回勅（IIカトリック教会で、教皇が全教会の司教または信者にあてて、教会全体の重要問題について書き送る手紙）「神は愛」は、名誉教皇ベネディクト十六世の最初の回勅でありました。

「神は愛：Deus Caritas Est」というタイトルが示すように、神の愛、カリタスは、教皇ベネディクト十六世のパトリックの後継者としての役割の中で、大きな位置を占めていたとあらためて思い起こしています。

教皇就任以前に、長らく教理省長官として活躍されたため、その印象が強く残り、頑固で厳しい保守的な人物だとか頭脳明晰な神学者というイメージが先行しましたが、実際には、慈愛に満ちたベネディクト十六世は「愛（カリタス）」を語る教皇でありました。

ベネディクト十六世は、教会における愛（カリタス）の業を重要視され、それが単に人間の優しさに基づくのではなく、信仰者にとって不可欠な行動であり、教会を形作る重要な要素の一つであることを明確にされました。

回勅「神は愛」には明確にこう記されています。「教会の本質はその三つの務めによって表されます。すなわち、神のこトばを告げしらすること、秘跡を祝うこと、そして愛の奉仕を行うことです。これら三つの務めは、それぞれが互いの前提となり、また互いに切り離すことができないものです(25)」。

当時、国際カリタスの理事会に關わっていたわたしにとっては、ベネディクト十六世が、この分野に大きな関心を寄せられ発言されたことから、力強い励ましをいただきました。わたしはベネディクト十六世は後代の歴史家から、「愛(カリタス)の教皇」と呼ばれるのではないかと期待しています。

2011年3月11日の東日本大震災の折りには被災された方々へ心を寄せ、その年の5月初めに被災地にサラ枢機卿をご自分の特使として派遣され、また被災者のために寄付をされたことも鮮明に記憶に残っています。またその年、4月に、メディアの企画で、世界の子どもたちの質問に答えた

ことがありましたが、教皇ベネディクト十六世は、日本の少女からの質問も受けられました。

「なんで子どもも、こんなに悲しいことにならなくてはいけないのですか」と問いかける少女に対して、教皇は、「他の人たちが快適に暮らしている一方で、なぜ皆さんがこんなにたくさん苦しまなくてはならないのか？ 私たちはこれに対する答えを持ちません」と、正直に答えられました。

その上で、「でも、イエスが皆さんのように無実でありながらも苦しんだこと、イエスにおいて示された本当の神様が、皆さんの側におられることを、私たちは知っています。・・・神様が皆さんのそばにおられるということ、これが皆さんの助けになることはまじがいありません。・・・今、大切なこととは、『神様はわたしを愛しておられる』と知ることです」と、苦しみのなかにあつても神の愛に身を委ねることが希望を生み出すのだと強調されました。

新しい福音宣教を掲げ、2010年に新福音化推進評議会を設置されたベ

ネディクト十六世は、世俗化が激しく進み、多くの人の宗教離れが進むヨーロッパでの再宣教だけではなく、教会の本質的な三つの務めである、福音宣教、典礼、愛の奉仕をそれぞれに重要視し、整えていくことを念頭に置かれながらペトロの後継者として教会を導かれたのだと思います。

回勅「神は愛」の冒頭にこう記されています。「人をキリスト信者とするのは、倫理的な選択や高邁な思想ではなく、ある出来事との出会い、ある人格との出会いです。この出会いが、人生に新しい展望と決定的な方向付けを与えるからです」。

深い思索の内に生きる神学者である教皇ベネディクト十六世は、信仰が具體的に生きられることの重要性を強調された方でありました。

2007年に司教として初めてアドリミナでローマに出かけたとき、教皇ベネディクト十六世から、個人謁見の場で、「あなたの教区の希望は何ですか」と尋ねられ、答えに窮したことがあります。しかし教皇は、福音宣教と

は他者との出会いと交わりの中で希望を見出すことだと強調された方でありました。

回勅「希望による救い (Spe Salvi)」の2項の最後には、次のように記されております。「キリスト教は単なる『よい知らせ』ではありません。すなわち、単にこれまで知られていなかった内容を伝えることではありません。現代の用語でいえば、キリスト教のメッセージは『情報伝達の』だけでなく、『行為遂行的』なものでした。すなわち、福音は、あることを伝達して、知らせるだけではありません。福音は、あることを引き起こし、生活を変えようとする行なうのです。すなわち未来の扉が開かれます。希望を持つ人は、生き方が変わります。新しいいのちのたまものを与えられるからです」。

さらに同じ回勅に、「人間は単なる経済条件の生産物ではありません。有利な経済条件を作り出すことによって、外部から人間を救うことはできないのです(21)」との指摘があります。その上で、「人とともに、人のために

苦しむこと。真理と正義のために苦しむこと。愛ゆえに、真の意味で愛する人となるために苦しむこと。これこそが人間であることの根本的な構成要素です。このことを放棄するならば、自分自身を滅ぼす(39)」と記されています。

先ほども触れましたが2007年12月、アドリミナ訪問でローマを訪れていた日本の司教団に教皇ベネディクト十六世はこう話しておられました。

「世界は、福音がもたらす希望の知らせを渴望しています。皆様の国のよくなきわめて発展した国々においても、経済的な成功や技術の進歩だけでは人間の心を満たすことができないことに多くの人が気づいています。神を知らない人には「究極的な意味で希望がありません。すなわち、人生全体を支える偉大な希望がありません」(教皇ベネディクト十六世回勅『キリスト教的希望について (Spe salvi)』27)。人生には職業上の成功や利益を超えたものがあることを、人々に思い起こさせてください。家庭や社会

の中で愛のわざを行うことを通じて、人々は「キリストの内に神との出会い」へと導かれます」。

教会の三つの本質的な務めを明確に意識しながら、多くの人に愛と希望を生み出そうとされた教皇ベネディクト十六世のことは、文書として、著作として多く残され、いまでもその著作を愛読される方は少なくありません。残されたことばにあらためて耳を傾けながら、その永遠の安息を祈り、わたしたち自身も福音に耳を傾け、福音を生き、福音を告げるものでありましょう。



エイル・Nさん

「2022年の世界的大混乱」

社会の声

学生の感想

■昨年7月に国士館大学で講演させて頂いた際に学生の皆さんから寄せられた感想をご紹介します。

ーつづぎー

☆

元受刑者の方に当時のことを聞いたり、深入りすることが不快な思いをさせるということが特に印象に残りました。親が元受刑者ということで学校で

いじめられてしまう子どもがいる現状を知り、もし自分に子どもができたときにそのようなことにさせないためにもしっかりと教育をさせておこうと思いました。

元受刑者というレッテルで今も苦しんでいる方々がいることを知り、就職活動や社会に出て働く際に経歴を隠すことができる制度があっても良いのではないかと思いました。経歴などは社長や上層部のみ把握していれば良いと思います、直属の上司には経歴を隠すことができるようにする仕組みがあっても良いのではないかと考えました。

今回のお話を聞いて、改めて人と関わるときに接し方を考えることを心がけようと思いました。お話をしていたき、ありがとうございます。

☆

自らが経験したことを話すということとはとても勇気があると思います。私は出所後のサポートが一番大切であ

り、心の支えになるのではないかと感じます。また、受刑者だから、偏見をもっている人も少なくないと感じますが、受刑者でも働ける場所はたくさんあるし、迎えてくれる人もたくさんいるということをもっと知ることができました。

☆

受刑者の刑務所での様子、刑務官の対応、出所後社会に出た時に大変なことについて知ることができました。

今まで元受刑者の方の話を聞くという機会がなかったため、先週の講義の際に、五十嵐さんが来てお話をしてくださると聞き、楽しみにしていました。

実際に、刑務所での話を聞いて、刑務官とよくケンカをしていたということについて、以前は受刑者だからだろうと思って終わりでしたが、刑務官側にも問題があるということ学びました。

また、裁判員裁判で死刑判決を出した裁判員が周りから「人殺し」と言われたこと、出所後に再犯をってしまった方に手紙の返事を書かなくて申し訳ないと伝えに行ったことが特に印象に残りました。

自分も元受刑者の方の社会復帰の役に立ちたいと思いました。

☆

再犯率が高い理由として身寄りの存在がないからだと考える。

なぜなら、身寄りの存在がいれば自分以外の生きがいや楽しさを見いだせると考えるからである。そのため、そうした存在のない受刑者は再犯を繰り返すのである。そうした結果、再犯率が高まっていると思う。

再犯を繰り返さないために今回授業で扱った逮捕された際の本人や家族との相談、面談や出所後の者に対する支援である住居支援、生活保護申請などのアフターケアは有効だと思う。

犯罪をしたから見放すのではなく、犯罪をした過ちを真摯に受け止め社会復帰のきっかけにしてほしい。その際に、上記のサービスを活用することが再犯の防止につながると思う。

☆

刑務所から出所してきた人は、差別的な目で見られるがそれに屈しなかったという話を聞いたとき、「ちっぽけなことでも私もよくよしてはいけいけな」と感じました。

また、受刑者の方と通じることができる文通なども興味を持ちました。

☆

最近ニュースでも、犯罪者の生い立ちについて取り上げられるようになりましたが、やはり幼少期、成長過程での環境が性格に大きく関わってくるのがわかりました。

犯罪者は周りの人からの偏見を受けてしまうことが多々ありますが、お互いを理解できる社会になれば良いと思います。

☆

犯罪をしてしまう事はもちろん悪いことだけれど、そこから更生して再スタートできるよう、日本の社会や周りの人ができるだけ受け入れていくことが大切だと学び、自分もどこかで偏見を持っていた節があったので、お話を聞いたことはとてもいい経験になりました。

川越の立てこもり事件の話は、川越自身の自分にとって身近な話であり、とても印象に残りました。マザーハウスに来ていたらあの事件は起こっていなかったかもしれない、防げたかもしれない事件だったと聞き、周りの環境がとても大切なのだ学びました。

これから少しでも多くの受刑者、元受刑者が救われる世の中になるように

今回の貴重な経験を活かして生活していこうと考えました。

☆

人は人生は見ずその行為だけで判断するという言葉が私自身にすごく響きました。犯罪をしてしまった人も人であるので家族と全く疎遠になっただけだったり、その一回がきっかけで人生が変わってしまうことは悪いことをしてしまっただけとそれが加害者にとつて大きな傷になっているというのを聞いて私もマザーハウスの文通ボランティアをしたいと思います。

☆

刑期を終え刑務所を出所しても、社会に居場所がない、受け入れてもらえない場所がないことから再び犯罪をしてしまう、この点、社会の犯罪者に対しての考え方として改めることも重要に

なると考えます。確かに、前に罪を犯し、刑務所に入った人を受け入れることはリスクや恐怖心からスムーズな受け入れや、理解をすることは困難であると考えます。しかし、元受刑者側の立場に立ち考えた時、社会に受け入れられない、支援してくれる人がいないことは辛く、苦しい状態であると予測します。再犯率が高い理由も、そのような社会の体制にあると考えます。そのため、犯罪に対しては厳しく取り締まることで抑止力を維持しつつ、罪を償い社会復帰した人が過ごせる環境を作っていくことも今後の課題であると考えます。

☆

一度刑務所に入った人と、一度も経験がない人、更生後であっても両面には壁があることがわかった。実際に刑務所がどのようなところか聞けてとても為になった。

☆

私はとある事情から犯罪者が苦手です。そして心が苦しくなるので共通する話題や実際の話も苦手です。

しかし、今回のお話を聞いて、苦手というのは変わらないですが、しっかりと更生した人もいるのに社会が拒んでしまうのは、日本では生きていく上で守らなくてはならないルール（特にわいせつなどの意志を持って行ってしまった犯罪に関しては）を破ってしまった事なのでかばうことは出来ませんが、あんまりよく無いなと思いました。

苦手で避けていたからこそ知らなかったことでしたが、実際のお話を聞くことで少し考え方が変わるきっかけになりました。お忙しい中ありがとうございました。

☆

私はこれまで刑法の分野につきましてもは学習してきましたが、犯罪というものに関わったことがなく実際に受刑者の声や刑務所ではどのような待遇を受けてきたのかなど全く聞く機会はありませんでした。

授業などで受刑者や刑務所のことなど少しは学習してきましたが、五十嵐さんの体験談や多くの受刑者の声などを聞ける機会を与えてくださりとても貴重な経験ができました。

私は無関係ではなく法学を勉強している者として少しずつでも受刑者の声などに耳を傾け小さな事ではあります。が具体的に行動に移せるようにしたいと思えました。

☆

現代社会では元受刑者には、就職や住居もなく、差別のような待遇を受けている。元受刑者の社会復帰を支援することは今まで考えたことが一度もなく、そのような支援もあることを学べ、

自分自身元受刑者に対するイメージが変わったため、周りに偏見を持った人がいたら、社会復帰への理解が必要なることを説明していきたいと思う。

出所者の見えない苦労や苦難がなんとなくわかった気がした。再犯者の多数が身寄りのない、居住先がないのは相談できる人や頼れる人がいないからだと思った。かなり難しい話の内容だったので今後の対策が重要になると思った。

☆

法学部生として学ぶ「刑法」は構成要件と刑罰を定めてあるだけであり、その刑を受ける受刑者のことを学ぶこと、教わろうともしませんでした。

その理由としては自分が犯罪者になることを一切考慮しておらず、そうならないために法律を学んでいるのです。

しかし、「運転免許を持っている人はいいますか?」、この質問をされて思

い出しました。教習所で習ったこと、自分が凶器を何食わぬ顔で乗り回していること。

最も衝撃的だったのが先日の立てこもり事件の原因です。(調べたわけではないので実際のこととはわかりませんが) 法務省の杜撰な対応のせいで、刑期を終えた一人の社会人が人との繋がりを絶たれ、再犯者にされてしまった。制度はまだまだ未完成であり頼り切れるものではない。本当に再犯率を下げるのは私たち一人一人のつながりなのだと思えることができました。

☆

お話を聞いてとても心が震えたり素直に感動しました。犯罪をしたとしても人間は何度でもやり直すことができるし今の自分ももっと高い志を持って生きていきたいと思わされるといふか力を頂きました。

今の世の中は偏見やただ一つを見るだけで判断したり評価してしまうとい

うところはとても共感したし視野が狭いのかなとも感じました。

☆

受刑者が出所して困ることに、携帯

電話を使えないという点があることを知らなかったので、知ることができた。確かに、携帯電話が使えなければ就職することも家を見つけることも難しいと思うので、再犯に繋がってしまう恐れがあるのかなと考えた。そういう携帯電話等の問題が起きないように捕まる前に解約をできる時間を作った方が良かった。

犯罪を行う人が悪いと思うが、その人の人生はそれだけではない。受刑者との手紙のやりとりなども興味があったので、インターネットで調べてみようと思った。

☆

物事を違う観点で見ているなど感じ、自分も一つのことを掘り下げたいける人間になりたいです。

☆

犯罪者の処遇を学んでいる自分たちからするとある程度社会復帰への理解があると思うが、世間の人たちは再犯率を鑑みても犯罪者が近くにいるのはいつ暴発するかわからないし、その被害者になりたくない気持ちになってしまふのは仕方がないのかもしれないと思った。

社会の人々に処遇の重要性を理解してもらわないと厳しい現状が続きそうに感じる。

☆

出所者が社会で共に生きていくのに、社会が居場所を作らなければ、また元に戻ってしまうと思う。受刑者に

反省を求めるだけでなく、自分がそういう状況に置かれた時にどうなるかを全員で考えていけば、社会はもっと変わると感じた。罰することは簡単だが、どう回復させ復帰させるかがより重要なのではないかと感じた。

☆



エイル・Nさん
「富士山と新幹線初代0型」

受刑者の多くが孤立であり、社会とのコミュニティがないことが原因で再犯を繰り返してしまうことが分かりました。そのため、ボランティアとの文通を通して、コミュニケーションを交わすことで、更生や社会復帰をしやすい環境を構築されているところに印象が残りました。

今回の話を聞いて、「元犯罪者だから普通の生活をしてはいけない」といった偏見を持つてはいけないということに改めて気づきました。

☆

犯罪をしてしまったことに対して犯罪を行った本人が反省することはもちろん大切だけれど、それと同じくらい犯罪者が刑務所に出る前や出た後のその人に対する社会の向き合い方によって犯罪者のそれからの人生は良い方にも悪い方にも変わっていくのだと思います。

☆

出所者の再犯を防止するための法律を立法する段階において当事者がいないため、有効な政策を行うことができないことについてとても共感しました。

☆

自分の偏見になってしまっているのが、犯罪をしてしまって捕まって再犯しての繰り返しで一度犯してしまった人はその生活を繰り返すことしかできないと感じていました。しかし、その中でもやり直そうとしたり再出発しようとする人もいると考えると、社会復帰に支援が必要だと感じました。その取り組みでちゃんと社会に復帰し、貢献することが出来る人たちが増えればいいなと思いました。

☆

犯罪性を有している人間というお話がありました。産まれながら持っていると言われてしまうのはとても酷だと思いました。

☆

別々の立場にある人がわかり合うのは厳しいものだと感じました。

約50%、二人に一人の確率で再犯をしてしまう状況で元受刑者を履歴書段階で断ると言うのは、冷たい言い方になってしまいかもしれませんがこちらからしたら無理もないものだと感じています。断られてしまう当事者からしたらなぜ社会は受け入れてくれないんだと感じてしまうかもしれません。採用する立場の人からすると普通の人を採用するのが無難と言う結論になってしまおうと思います。

社会に元受刑者の気持ちはわかるはずもない、とおっしゃっていましたが、逆に言うと、社会の考えも元受刑者にわかるはずありません。

社会だけが受け入れるというスタンスを求めるのではなく、元受刑者側も社会の考えを少しでもいいので理解する、互いに理解し合うということが社会復帰の第一歩目なのではないかと思いません。

自分のこういう考えも元受刑者の社会復帰の妨げなのではないかと思いません。今回の講演で自分の考えを再確認することができ、改めなきゃいけないと反省しました。また、バースデーカードを書くという活動は私も参加してみたいと思いました。

☆

法務省は中途半端という言葉が心に刺さった。いかに生の声に耳を傾けていないか、生の状況に目を背けているかが感じられたからだ。

収容所の檻は外から見えるため常に監視されていたりしてかなり苦痛であったことを聞き、収容所での生活は自分の予想を上回るものだった。

また、裁判員制度について、国民の一般的感覚を取り入れることで質の高いものを目指す過不足ない十分な制度だと感じていたが、裁判は一人の人生を左右する非常に貴重なものであることを再認識した。そんな大きすぎる責任を一般市民が背負うことになるのは確かに酷であると感じた。

人の人生を左右することは考えてみれば想像はつくことではあったはずだし学んだはずなのに、こうして今話を聞いて再認識させられたのは、重きを置く点が被告人を一人の人として見ることから離れていたことに気がついて自分でもかなりショックだった。

収容者で再犯者が半数を占める現状で、社会復帰をもっと積極的に図るべきだとも改めて感じた。社会とのつながりを作り、それを維持したり、国が釈放者の保護施設等への受け入れを積極的に進めたり社会に出てスムーズに生活を送れるようにする方に重点をおくべきだ。

ニユースを見ていても孤独を感じている人が多いように思う。

今回の講演で、自分にできることがあると知った。それは、犯罪歴のある家族を持つ人々が責められていたとき、第三者の自分だからこそ助けをあげることができるということだ。

また、ラブレター・プロジェクトへの参加だ。社会とのつながりを、また一人ではないということを感じてもらおう手助けになればいいと思う。

☆

これまでの授業で犯罪を犯してしまう人は、子供の頃の自らを取り巻く環境が犯罪の要因になりやすいということを知っていたので、犯罪者は心に傷を負った人が多いとおっしゃっていたのが本当なんだなと感じました。

犯罪者というレッテルは一生つきまとうものだと思いますが、自分の罪の重さを忘れずに、でも、自分のこれらの人生を全うすることもその人の持つ権利だと思います。

☆

携帯の契約が結べないというところに驚きました。出所して一から社会で働き、社会の中で更生して行くことが望ましいのに、今の時代携帯の契約が結べないとなるととても不便な生活を余儀なくされると思いました。そしてまた厳しい生活や社会に不安を持ち再犯を繰り返してしまう可能性を感じました。こういった面からの処遇も必要だと感じます。

☆

私は刑務官や警察官になることを考えていた。しかしその前に再犯防止のためにどのような行動を取るべきかについて、マザーハウスや他の団体から学ぶべきことは多いと考えた。

☆

刑務作業のあり方というものについて考えるきっかけとなりました。

刑務作業をするからには、その後の社会復帰へと繋がるような企画が必要であるし受刑者が出所したあとのサポートという部分もとても重要であり、考えるべきことだと改めて感じる事ができました。

☆

今回の講演を聞いて、自分が思っていたのとは随分異なっていることがわかりました。

実際に刑務所に入った人でないと、辛さや刑務所のよくない点などはわからないとおっしゃっていてその通りだと感じました。

警察官になる人としてもっと勉強をしなければならぬと思いました。

☆

受刑者に反省を求めるだけではなく、もし自分がその状況に陥ったときのことを全員が考えていけば、社会ももっと変わるのではないかと感じた。

罰することは簡単だが、そこから社会に出ていくためにどのように回復させるかというプロセスが大事なのではないかと思った。

☆

自分が実際に経験したからこそ思いが心に伝わってきたので、説得力と言葉の重みが凄かったです。

誰が犯罪者になりうるか分からない、絶対はない、などの言葉が心に刺さりました。

☆

特に印象に残った言葉は、刑務所はガラスケースの中で生活しているようなもの、という言葉です。

この言葉には色々考えるとところがあ
りました。

☆

元受刑者の方のお話を聞く機会がな
かった為、とても新鮮でした。中学の
頃の先生もずっと言っていたのです
が、人間やってしまったことへの反省
も大事だけど、そのあとの行動が大切
というのがお話を聞いてより強く感じ
ました。

☆

犯罪者にも本人の過去があり、出所
後も社会の厳しさや周りの人間からの
犯罪者としてのレッテル貼りや扱いに
よって更生しにくい環境であることを
知りました。

☆

「受刑者の過去ばかりではなく、こ
れからどう生きたいか、どう生きるの
か。未来にも目を向けて欲しい」とい
う言葉がとても頭に残りました。私た
ちはつい、何をして刑務所に入ったの
か、どう思ったのかなどに目がいつて
しまいその人自身を見るという事をし
ていませんでした。

再犯者が多い現状、再犯を防ぐには、
という事を考えるのならば受刑者の目
線にもなって物事を見る必要はあると
思います。私は今回の講演でそれを強
く再認識しました。

☆

お話をしている最中、たまに声が大
きくなるところが見受けられました。
個人的には少し感情的になっているの
かなという印象でした。しかし、それ
ほど本気になって見ず知らずの私たち
に向き合っている証拠だなと感じまし
た。

犯罪者というだけで出来ない人間だ
とか近寄りがたいという偏見を持たれ

るのは仕方ないとこれまでは考えてい
ました。ですが、お話を聞いてみて考
え方がすこし変わった気がしました。

また、五十嵐さんは犯罪の種類に
よってその犯人に対する気持ちは変わ
るでしょうか。また機会があれば聞き
たいと思います。

ちなみに私は今回のお話を通しても
性犯罪者だけは許せないと思ってしま
います。殺人よりもたちが悪いと思っ
てしまいます。心の病だという言葉訳
も納得がいきません。このような気持
ちの人間がいても五十嵐さんはいいと
思いますか？

最後に、貴重なお話ありがとうございました。
いろいろな立場の人間がい
て、いろいろな意見がある中で生きて
いくのは大変だと思いましたが、変え
られる変えられない関係なく、変えた
いと強く思うことから始めようと思
いました。

ーつづくー

五十嵐亜利沙（妻）による

育児日記

最近、長男A君と二人でお昼ごはんを食べに行くことが増えました。

数年前までは、お店の中を走り回っていたA君、こんなにゆっくりご飯を食べられる日が来るなんて…！

子どもたち四人が一緒になると大変なことになるので、家族全員で外食するのはまだ時間がかかりそうです。

クリスマスには、長女Kちゃんとデートをしました。ランチにラーメンを食べて、品川でイベントに参加し、帰りは激混みソラマチでディナーをしました。その後、パパのクリスマスプレゼントの靴を買って帰りました。



幼稚園で次女Rちゃんの話があり、園での様子を聞くと、泣いた友達がいると駆け寄りたり、争いがある間に入って解決策を提案したりと、意外な一面を聞かされて、驚きと共に嬉しかったです。

三女のMちゃんは、朝起きると私の布団に入ってきて、私が目を開けると満面の笑みで私を見つめて抱きしめてくれるのが、とっても幸せで気持ちよく目覚めることができます。

ささきみつお コーナー

「ふうけもん」の復活劇

命を懸けた映画製作

元祖便利屋、右近勝吉さんのクリスマスチャンとしての証をマンガにした『ふうけもん』（新生宣教団刊）を読んで感動した韓国女性Kさんが、自分で書いたシナリオを基に、映画「ふうけもん」を製作したのは、今から約15年前である。

「ふうけもん」とは、右近さんの出身地、佐賀の方言で、「変わり者」「風来坊」という意味だ。

「この映画に命を懸けています！この映画ができなければ私は死にます！」と言いながら、Kさんは断食して祈り、徹夜で祈り、泣きながら祈り、一人で日本中を走り回って製作資金を集めてこの映画を完成させた。

監督は映画「釣りバカ日誌」シリーズで有名な栗山富夫、俳優は中村雅俊、浅野ゆう子、河相我聞、垣内彩未、哀川翔、竹脇無我、竹中直人、中村玉緒などの豪華キャスト。

その流れの中で、私は弁護士として映画の全国上映に協力することにした。

大手映画会社T社と配給契約を結ぶ段取りをし、全国の映画館100館以上で同時上映できるころまでこぎつけた。

無名の外国人女性が作った映画をT社が配給するのは異例中の異例のことである。

「ふうけもん」、お蔵入り

だが、多額の宣伝費調達と前売り券販売が予定通り進まず、全国上映直前の上映中止・配給契約解除という最悪の事態に追い込まれた。

こうして、「ふうけもん」はお蔵入りになってしまった。「お蔵入り」とは、製作完了後の映画が何らかの事情で上映されないままになってしまいうことだ。

昨今の不況の時代に、映画は10本製作して1本当たれば良いとされている。まして、一度お蔵入りした映画が上映の陽の目をみることはほとんど無い。

「ふうけもん」、奇跡の復活！

ところが、お蔵入りしてから約5年後、大阪で試写会をしたら4000人も観に来てくれた。

これに勇気を得たKさんは、大胆にも、2014年9月1日を皮切りに、約4か月の間に、北は北海道から南は沖縄まで全国43都道府県の公会堂や

文化ホールを使って、自分で上映する日本縦断自主上映を敢行した。

朝日や読売を含むマスコミにも取り上げられて、観客の入りはまずまずのことだった。神の奇跡としか言うほかない。

「人生は神のドラマだ！」とは私の持論であるが、Kさんによる「ふうけもん復活劇」は、まさに神のドラマそのものであった。

「ふうけもん」のお蔵入りの期間は、Kさん自身のお蔵入りの時でもあった。この間、必死で祈り、あちこち頭を下げて駆け回り、上映資金を集めて試写会にまで持ち込む過程で、Kさん自身、自分の至らなかつた点を徹底的に悔い改め、キリスト信仰の原点に立ち返る努力を日々繰り返した。

「ふうけもん」の復活劇は、Kさん自身の復活劇でもある。

「誰でも真摯に悔い改めるなら、天の父は必ず復活するチャンスを与えてくださる」という、すばらしい証ではないだろうか。

受刑者からのお手紙紹介

塀の中のたより

できない理由を探すなら

M 刑 O さん

懲罰が明けて、これまで職業訓練を修了する度に私を受け入れてくれていた木工場へ配役となりました。木工場における基本作業を熟知していた私には、工場担当さんに「オールドルーキー」と呼ばれ、懲罰明けなのにもかかわらず、「仕上げ場」という、作業のうちの1つの区画のまとめ役として、責任者の下で他の作業者へ指示を出したり、段取りを組んだりといったことをやらせて頂きました。

受刑生活は、社会の中でルールを守り、人様に迷惑を掛けずに暮らし、ゆくゆくは人から受けた恩を社会に返していけるようになるための訓練の場で、基本的に自分のための（将来のための）時間だと考えていますが、事実として懲罰になって信頼を裏切った私を再び信じようとしてくれた工場担当さんや、折に触れて声を掛けて下さる工場主任さんをはじめとする職員さんに対して、日々、基本動作や勉強をし続けること、刑務作業で努力し続けることを通して、その姿を見せ、ひいてはこの目標を達成するための第一段階に立つことで、恩を返す時間であるとも考えています。

返さなくてはならない恩がたくさんあり、そうして背負っているものは大きいので、プレッシャーはあります。ですが、20年以上生きてきて、裏切ったのにもかかわらず、手を差し延べてくれた経験が家族以外では初めてなので、決してマイナスな影響はなく、むしろ鼓舞してくれており、日々が充実しています。この経験から、自分のことを好きでいられて、周囲の人から私の存在を認められて、活躍できる場所

があれば、「再犯する、しない」という次元ではなく、積み上げた実績や責任から「犯罪なんてできない」という次元になり、再犯することは無くなるのではないかと思いました。

私はこれまで3度の少年院生活を送ってきました。また、ADHDなどの精神疾患を抱えていて、今回の裁判で行われた精神鑑定でそれらに気付くまで、気持ちの上下が激しく、自分でも何をしたいのか分からなくなるぐらい落ち着きがなく、でもコントロールができないことなどで苦しんできました。今まで私がしてきた犯罪に精神疾患の影響があったと言われましたが、犯罪は、私が友人との約束を破ったり嘘をついたりして、学校に居づらくするような行動をとったことや、働かずに容易に現金を得られる楽な自分のことしか考えない、といった私の自由意志で決めた言動が原因で、精神疾患で生きづらかったのはあるかも知れませんが、全て、思考や性格といった、「私」に責任があることは理解しています。

こういった経験から、今は支えてもらう側ですが、ゆくゆくは同じように

困っている人を支える側になりたいと考えています。具体的なビジョンは描けていませんが、これから先、マザーハウスの皆さんのご支援を頂きながら学ばせて頂き、可能であれば出所して自らのことを自分でできるようになった後に、皆さんにして頂いたことを別の方へしていくことなどを通して明確にしていきたいと思います。そのためにもまずは、今この場所で私が誰かのためにできることを探して、おせっかいにならないようにして行動することから始めてみます。今できないければ将来もできないし、できない理由を探す時間があるなら、今できることで最善を尽くす方が利口だと思うので、愚痴をこぼすより行動します。

人員が限られている中、MLPに参加させて頂き、本当に有難うございます。趣旨を遵守し、文字のみという制約の中で相手方のことを想って、暴力ではなく言葉で物事を解決できる力を身につけ、また、私とのやりとりを通じて、相手方に「貴重な時間を割いて良かった」と想ってもらえる有意義な場にさせて頂きたいと思えます。

看護師 中谷先生による

健康相談窓口

論文紹介

皆様のご協力のもと、下記内容の論文を書き上げることができました。有難うございました。

詳細に関しては、学会誌の発行(2023年3月)を待ち、全文を公開致します。もうしばらくお待ち下さい。今回は、抄録をご紹介致します。

コロナ禍における感染対策が

矯正施設の男性長期受刑者に

もたらした影響の検討

【抄録】

新型コロナウイルス感染拡大は、刑務所内にも大きな影響を及ぼしている。感染拡大を防止するため、制限されたことは、刑務作業・炊場・入浴・行事・運動・面会である。本研究目的は、コロナ禍における感染対策が矯正施設の男性長期受刑者にもたらした影響の検討である。アンケート調査を2022年2月から6月まで実施した。研究対象者の属性は、108名(有効回答率14.4%)、平均年齢48.0±10.6歳、施設での平均生活歴9.8±9.1年である。「ストレスや不安の対象を理解している者」98名(90.7%)であった。長期刑の人がより感染対策に対するストレスが大きいとし、その影響を明らかにするため、従属変数を罪名とし、重回帰分析を行った。その結果、刑務所での生活歴・刑期も長い受刑者は、「自分と自分の家族への感染不安」を顕著に抱いていた。受刑者に施設内における感染状況に関する情報が提供されないことも不安要因となっていると考えられた。

(キーワード)

新型コロナウイルス 刑務所 感染対策 受刑者 不安

風間勇助理事による**刑務所アート展****情報**

刑務所アート展担当の風間です。

五十嵐亜利沙(妻)による**ラブリイDAY**

毎年恒例のマザーハウス京都修学旅行に、長男A君も一緒に行きました。

父親と一緒に寝ないで、毎晩Kさんの部屋で寝ていたそうです。A君に「なんで?」と聞くと、「優しいから」と言っていました。

一方の父親は寂しくて泣いていたそうです(笑)。

昨年十一月末の締め切り時点で、全国五十二名の受刑者より125作品のエントリーがあり、十二月十七日には、全作品を会場に並べた公開審査会を無事に開くことができました。審査結果については、今しばらくお待ち下さい。

また、皆さんからの応募に対して、お返事を書くのが遅くなってしまい申し訳ない気持ちでいっぱいです。

たくさん作品をお送り頂き、本当に有難うございました。

初めて詩を書いてみたという方、所内誌には書けずに溜め込んでいた思いを書いてみたという方など、この企画

をきっかけとして、様々な思いを巡らせた力のこもった作品ばかりでした。

二月十七日から三月六日まで、都内(東京都小金井市)にあるギャラリーにて再度展示をする予定です。

もし、まだ応募したいという方がいらっしゃいましたら、この展示に間に合えば受け付けます。

本プロジェクトについて、東京新聞や毎日新聞で取り上げて頂いたほか、東京都府中市のコミュニティFM局であるラジオフューズさんの番組「刑務所ラジオ」でも紹介頂き、応募された短歌や俳句作品のいくつかを放送したところ、好評を頂きました。

さて、総評とはいえませんが、今回の応募作品の傾向について、いくつか触れさせていただきます。

まずは、現在のロシアによるウクライナへの侵攻状況に対して、その悲しみや平和を願う作品などがたくさんありました。塙の中に閉じられようとも、その想像力は世界まで広がるものであることが改めて伝わってきました。

次に、刑務所の中から感じられる自然、例えばハトやスズメといった鳥、花や樹木、空など、そうしたものに目を向けるものも多くありました。俳句などはそもそも、そうした風景を詠むものなので当たり前かも知れませんが、ただ興味深いのは、変わらずつもそこにある自然に対して、それを眺めている自分の状況は過去とは異なっているというような、そうした対比がうかがえたことでした。

例えば、同じ花を見ていても、今その花を刑務所の中で見ている自分と、過去にその花を見ていた自分はどんな思いだったかなど、花を想像力の起点にしているいろいろな感情を思い起こすような、そうした作品がみられました。

「大切な時間」という課題テーマを巡っては、過去の大切な思い出に関するものが多くあり、来場者の方もその切ない思いを受け取っていました。「誰もが持っているこんな優しい思い出を持つ人に、いったい何があったのか」という声も、来場者から聞こえました。

塀の向こうにいるのが、「犯罪者」ではなく、ここにいる私たちと同じ経験や感情をもつ同じ人であることが伝わっていたと思います。あるいは、誰でも環境や状況が違っていたら、塀の向こうにいたかもしれない、そんな風に思わせたのかも知れません。

絵画作品では、「意外と明るい絵が多いですね」「色使いがきれいですね」といった声が多くありました。刑務所の中は鮮やかな色が少ないせいでしょうか。また、人物画が少ないのは、何か制約があるのでしょうか。「同囚の寝顔とか、看守の表情とか、そんな人物の絵も見てみたい」。そんな声もありました。

細かな筆致で、時間をかけて塗り重ねた作品は大変力強く、見る人の目を惹きました。

ここで、ひとつ漫画作品を紹介したいと思います。私が考えるアートの良さを教えてくれた漫画作品です。

『ブルーピリオド』という、芸大受験に向かう高校生を描いた青春漫画

で、主人公は、それなりに頭が良いのにあえてヤンチャ風な仲間とよくつるんで、なんとなく楽しい(けどどこか退屈な)日々を過ごしていました。

もちろん大事な友達だけれど、いつもなんとなくの意味のない表面的な会話で、物足りなさを感じていたある日、絵と出会います。

そして、高校の美術の先生に「絵を描いてみないか」と課題を出され、主人公は朝の渋谷を「青」で表現しました。仲間と朝まで遊んで過ごした朝の渋谷です。

校内で作品が展示され、クラスメイトから「綺麗だね」「これって朝の渋谷?なんかわかる、この青」とコメントされて、主人公は「生まれて初めてちゃんと人と会話できた気がした」と感じ、芸大受験の道に進みます。伝わった!という喜びの原体験のようなシーンです。

セリフなどは正確ではないので、私がかややストーリーを歪曲してしまっているかも知れませんが、要するに、アートを介して初めて誰かと何かを共有す

ることができた、ということがあると思っと思っています。

絵ではなくても、言葉の表現でもそれはあります。恥ずかしいポエムだと思えるものでも、誰かに共有したいと思っっている何か、自分が何者かを知るための表現、それは人の深いコミュニケーションにつながると思います。

『ブルーピリオド』で描かれるのですが、美術の課題って興味深いです。自分を知るために、自分が何に心惹かれるのか、スクラップブックに気になったニュースや作品や風景や言葉などを集めていく課題があったりします。

皆さんにとっても、自分が好きなものは何か、それを知ることが自分を知ることにつながって、そんな自分を誰かに伝える表現を通して、厳しい毎日の中で、日々の暮らしがほんの少し豊かになるかも知れません。

審査結果などについては次回お伝えできればと思います。

回復プログラム 実践

■受刑者の皆さんにお送りしている「回復プログラム」冊子より抜粋して掲載しています。繰り返し取り組んで頂き、自分自身を知ることにつなげて頂けたら幸いです。

■「回復プログラム係」宛にお手紙で回答を送って頂ければ、スタッフや、社会のボランティアによる正直なコメントを返信させていただきます。

【第9回目】

・ 社会に出ることを想像し、準備する。

1. 社会に出ることを考える時、生じる不安は何ですか。

考え得る限りの不安要因を列挙してみましょう。

2. それらの不安をどのように克服できると考えていますか。

編集後記 by 編集局

新年明けましておめでとうございます！本年も宜しくお願い致します！
今号では「塀の中のたより」コーナーが少なくなりましたが、今年のマザーハウスたよりもお楽しみに♪

お知らせ

○MLP ペア決め現状：受刑者側の希望者よりも文通ボランティアが少ないため、文通相手がない受刑者を優先しております（現在、約10人待ち※毎月の新規入会の受刑者の分も含まれています）。文通相手追加希望の受刑者はお待ち下さい。

○冊子 NEXT は寄贈終了、サインズは休刊に伴い、たよりへの同封が終了しました。

○フランシスコ事業部は、会費を全額納付された方のみのご利用となります。フランシスコ事業部を利用しない方は、会費の分納が可能です。

なお、マザーハウスに送られた切手やお金は返還できません。あらかじめ資料をよく読み、計画的に送られるよう、何卒お願い致します。

○下記に当てはまる場合は、事務局までお知らせ頂きたく、宜しくお願い致します。
・突然たよりが送られなくなった。

- ・刑期（出所日）が変更になった。
- ・入会申込書もしくは会費を送って2か月が経過後もマザーハウスから何も届かない。
- ・聖書（寄贈された中古のものです）の送付を希望する（送料800円分が必要です）。

○会費やフランシスコの費用を切手で納める場合（84円以上の切手のみ使用可）は、1枚につき現金交換手数料5円がかかります。
（例）100円切手×5枚の場合：500円－手数料5円×5枚分＝受領額475円

○絵画を獄中 POST シリーズへ応募する際は、その旨を都度、ご明記願います（明記無い場合には、たよりでのみ掲載となります）。

○たよりでは、投稿文以外の普段のお手紙から抜粋して掲載することがあります（受刑者の皆さんは、入会申込書に同意欄があります）ので、「掲載してほしくない」というお手紙・絵画につきましては、都度「掲載不可」と明記して頂きたく、宜しくお願い致します。

マリアコーヒー (ルワンダ・コーヒー)



♪製造から販売まで、元受刑者が携わっております。

FAX: 03-6659-5270

メール: maria_coffee@motherhouse-jp.org (QR ↑)

価格: 粉200g または 豆200g …… 972円 (税込)

カフェドリップ10g (1回分) …… 108円 (税込)

☆継続して購入・販売してくださっている皆さま (順不同) ☆

カトリック茅ヶ崎教会/カトリック北仙台教会/カトリック所沢教会/カトリック浜松教会/カトリック東山教会/カトリック布池教会/カトリック菊名教会/カトリック中田教会/カトリック新子安教会/カトリック碑文谷教会/カトリック桃山教会 (平和環境部) /カトリック東仙台教会/カトリック春日部教会/カトリック足利教会/カトリック神田教会/カトリック太田教会/カトリック大分教会/カトリック西千葉教会/カトリック下井草教会/カトリック新潟教会/カトリック多治見教会/カトリック芦屋教会/カトリック鷺ノ宮教会/カトリック松戸教会/ドン・ボスコ社/クリスト・ロア宣教修道女会/日本カトリック神学院/聖母訪問会



☆ルワンダの祈り☆



ルワンダでは、1994年、フツ族によるツチ族の大虐殺がありました。史上稀に見る残虐な内戦によって、ルワンダの人々は心身ともに非常に深い傷を負います。

しかし内戦終了後、恨みや憎しみから、復讐が復讐を呼ぶ状況に陥りかねない中、ツチ族の人々は、復讐ではなく、和解と共生を選択しました。マリア・コーヒーは、この和解と共生の地から届けられた生豆を使用しております。

マリアの紅茶



♪オーガニックの純スリランカ産のセイロンティーです。

FAX: 03-6659-5270

メール: maria_coffee@motherhouse-jp.org (QR ↑)

価格: 50g (2g入り25袋) …… 756円 (税込)

オンラインでのご注文: <https://mariacoffee.shop/> (QR ↓)



ラウレンシオ (便利屋業)

♪元受刑者の就労支援の一環として、不用品処理、遺品整理、掃除などをさせていただきます。お見積りは無料です。

(2020年12月より、株式会社ルツに移行しました。)

TEL: 03-6659-2110 / FAX: 03-6659-2180

メール: info@ruth-llc.co.jp

獄中 POST シリーズ

♪現在、引き継ぎ作業中のため一時的に活動を休止しております。再開次第、お知らせさせていただきます。引き続き宜しくお願い致します。

古本募金 (きしゃぼん)

♪書籍やDVDを下記にご寄付頂くと、マザーハウスに還元されます。

送り先: 〒358-0053 埼玉県入間市仏子 916

マザーハウス きしゃぼん係

(マザーハウス事務所に送らないようお願いください)

TEL: 0120-29-7000

お問合せ

いつも有難うございます。随時ボランティアの方を募集しております。

TEL: 03-6659-5260

メール: info@motherhouse-jp.org

(QR →)



ホームページ: 「NPO マザーハウス」でご検索ください。(QR ↓)



支援

☆正会員 (一口5000円/年) ☆賛助会員 (一口3000円)

☆社会復帰支援 (ご寄付) を随時募集しております。

→振込口座名: 【トクヒ】マザーハウス

郵便振替口座 … 00170-0-586722

みずほ銀行 … 新宿支店 普通口座 2376980

※ info@motherhouse-jp.org 宛に内訳をご送付願います。

☆洋服等の物資の送付先:

〒130-0024 東京都墨田区菊川 1-16-18-1F マザーハウス

(TEL: 03-6659-2110)

マザーハウスたより 23' 1月号

発行日: 2023年1月15日 発行責任者: 五十嵐 弘志
〒130-0024 墨田区菊川 1-16-18-3F NPO 法人マザーハウス



↑ 理事長 Facebook

↑ 理事長妻ブログ

↑ MLP 問合せ